

明治学院大学シエーンベルク・フェスティヴァルについて

岡 部 真 一 郎

二十世紀作曲界の巨匠、アーノルト・シエーンベルクが晩年を過ごしたカリフォルニアで世を去ったのは、一九五一年七月十三日のことであった。すなわち、本年、二〇〇一年をもって、彼の没後五十年の歳月が流れたこととなる。明治学院大学のパレットゾーン白金を会場とした「シエーンベルク・フェスティヴァル」は、これを記念して、ヴィーン・シエーンベルク・センター、および在日オーストリア大使館の全面的な協力の下に、二〇〇一年七月に開催された催しである。

多岐に渡ったフェスティヴァルのメインは、日本経済新聞社と本学の主催によるマルチメディア展である。これは、既にヨーロッパ各地を巡回している展覧会をそのまま東京に移設して開いたものだ。解説のCD（日本語版は、今回の東京における開催のために、樋口隆一により新たにヴィーンで録音された

ものである）を聞きながら展示をまわり、Videオの上映を鑑賞し、またパソコンを通してヴィーンの資料を閲覧することなどにより、生涯はもとより、音楽、美術からゲームや日用品の発明まで、多方面に渡ったシエーンベルクの活動ぶりを実感させる企画であった。この展覧会のために今回、東京で制作された日本版のカタログは、「資料としての価値も高い」（『読売新聞』二〇〇一年七月二十三日付）との評価を受けている。

一方、国際シンポジウム「シエーンベルクと さまざまな伝統」も十五日、十六日の二日間、アートホールを会場に開催された。佐野光司、石田一志、長木誠司、大田美佐子ら、我が国を代表する音楽学者をはじめ、クリストファー・ヘイリー（ロサンゼルス・ヴィーン）、エリカ・シャラー（ヴェネツィア）ら海外から招聘された第一線の専門家をも交えたセツショ

ンでは、過去、同時代における関係性、そして後世への影響まで、シエーンベルクを多様なコンテクストにおいて捕え直すことを目指すものとなっていた。また、ここでは、我が国におけるシエーンベルクの受容の在り方についての議論も大きな注目を集めた。さらに、大原まゆみ、四方田犬彦、ダ・コスタ・マイヤー（ニューヨーク）による美術、映画からの視点を踏まえた考察も、示唆に富む、極めて刺激的なものであった。

加えて、五十回目の命日にあたった七月十三日と十五日には、樋口隆一指揮、佐々木典子、小山実稚恵らの演奏による《ピエロ・リュネール》、同十六日には、小鍛冶邦隆指揮東京現代音楽アンサンブル（Comet）による《セレナーデ》およびA.ゲールの五重奏曲をプログラムに組んだ演奏会（主催：明治学院バツハ・アカデミー）もアートホールを会場に行われ、シエーンベルクの音楽とその強い影響の下にある英国のゲール（一九三三年生まれ）の作品に直接触れる機会が設けられたことも、特筆されてしかるべきであろう。

ここでは、上述のシンポジウムにおいて発表されたペーパーのなかから、シエーンベルクとモーツァルト、およびJ・S・バッハの関係を論じた二論文を掲載する。前者の著者であるマティアス・シュミットは、ヴィーン・シエーンベルク・センターの気鋭の音楽学者、その翻訳を担当した大田美佐子は本学文学部非常勤講師、後者を執筆した樋口隆一は、本学文学部教授・文学部長である。

「文中敬称略」

15. 7. 2001 So

Sektion I (13:00 - 16:20) Arnold Schoenberg und Musiktradition in Wien

Ryuichi Higuchi (Leitung):

- 13:00 - 13:20 Ryuichi Higuchi: Zwischen Bach und Moses
13:20 - 14:00 Christopher Hailey: "Das Hohe auf der Erde Suchen"
Zemlinsky, Schreker, Schoenberg und die Ästhetik des Modernen Praktikers
14:00 - 14:50 Matthias Schmidt: Arnold Schoenberg, ein 'Schüler' W.A. Mozarts
14:50 - 15:10 Kazushi Ishida: Schoenberg und Hauer
15:10 - 15:20 Pause
15:20 - 16:00 Christian Meyer: Arnold Schoenberg zwischen Richard Strauss und Gustav Mahler
16:00 - 16:20 Diskussion

16.7.2001 Mo

Sektion II (10:00 - 13:50) Arnold Schoenberg als Tradition

Shinichiro Okabe (Leitung)

Sektion II a

- 10:00 - 10:20 Shinichiro Okabe: Bemerkungen zum Verhältnis Schoenberg
Weberns musikalisches Bildnis von Schoenberg
10:20 - 11:00 Erika Schaller: Schoenberg und Nono
11:00 - 11:10 Pause
11:10 - 11:30 Misako Ohta: Berührungspunkte zwischen Weill und Schoenberg
11:30 - 11:50 Kunitaka Kokaji: Schoenberg et France 1913–21
11:50 - 12:50 Pause

Sektion II b

- 12:50 - 13:10 Seiji Choki: Schoenberg-Rezeption in den dreißiger Jahre in Japan
13:10 - 13:30 Koji Sano: Schoenberg and Japan The introduction of 12 tone-technique
and its meaning
13:30 - 13:50 Diskussion

Sektion III (14:00 - 16:30) Schoenberg und die Künste

Ryuichi Higuchi (Leitung)

- 14:00 - 14:30 Mayumi Ohara: Kunst um die Jahrhundertwende in Österreich und Deutschland
14:30 - 15:15 Esther da Costa Meyer: Before Kandinsky Schoenberg the Painter
15:15 - 15:25 Pause
15:25 - 16:10 Inuhiko Yomota: On the three films of Straub/Huillet on Schoenberg
16:10 - 16:30 Diskussion

国際シンポジウム

「シェーンベルクと さまざまな伝統」

(日本語・ドイツ語・英語)通訳つき 入場無料
会場 明治学院大学アートホール

7月15日(日)

セッション (13:00 - 16:20)「シェーンベルクとウィーン音楽伝統」樋口隆一(司会)

- 13:00 - 13:20 樋口隆一:「バッハとモーツァルトのはざまに」
13:20 - 14:00 クリストファー・ヘイリー:「シェーンベルク、ツェムリンスキー、シュレーカー」
14:00 - 14:50 マティアス・シュミット:「モーツァルトの弟子 シェーンベルク」
14:50 - 15:10 石田一志:「シェーンベルクとヨーゼフ・マティアス・ハウアー」
15:10 - 15:20 休憩
15:20 - 16:00 クリスティアン・マイヤー:「R.シュトラウスとマーラーの間のシェーンベルク」
16:00 - 16:20 ディスカッション

7月16日(月)

セッション (10:00 - 13:50)「伝統としてのシェーンベルク」岡部真一郎(司会)

- a(10:00 - 11:50)
10:00 - 10:20 岡部真一郎:「ヴェーベルンによるシェーンベルク」
10:20 - 11:00 エリカ・シャラー:「ルイジ・ノーノのシェーンベルク受容」
11:00 - 11:10 休憩
11:10 - 11:30 大田美佐子:「ワイルとシェーンベルクの接点」
11:30 - 11:50 小鍛冶邦隆:「シェーンベルクとフランス」
11:50 - 12:50 休憩
b(12:50 - 13:50)
12:50 - 13:10 長木誠司:「日本の1930年代におけるシェーンベルク」
13:10 - 13:30 佐野光司:「シェーンベルクと日本 12音技法の導入とその意味」
13:30 - 13:50 ディスカッション

セッション (14:00 - 16:30)「シェーンベルクと諸芸術」樋口隆一(司会)

- 14:00 - 14:30 大原まゆみ:「世紀転換期のオーストリアとドイツの美術」
14:30 - 15:15 エスター・ダ・コスタ・マイヤー:「画家シェーンベルク」
15:25 - 16:10 四方田犬彦:「ジャン＝マリー・シュトラウブ/ダニエル・ユイレによる3本のシェーンベルク映画について」
16:10 - 16:30 ディスカッション